

## 基調講演：「21世紀のロータリー」

元R.I.理事・R財団元トラスティー

R.I.2004年度国際大会委員長 千 玄室



大分お疲れになったと思いますので、皆さん一度お立ちになって元気よく伸びをして、大いに体操をして頂けますか。少し身体を動かして気分的にリラックスしましょう。

いよいよこの本会議も、後はガバナーノミニ一、ガバナーエレクトそれぞれのご挨拶、また、各委員会の報告と基調講演を残すのみになりました。皆様、お疲れのところ大変申し訳ありませんが、ちょっとお耳を拝借させて頂きたいと思います。

まず、会長代理としてわざわざご列席頂き、そして大変示唆に富んだ有益なお話を頂戴致しました板橋元R.I.理事、そしてご同伴の奥様に厚く御礼を申し上げます。ご遠方からお出で頂きまして誠に恐縮に存する次第であります。板橋元R.I.理事は色々な意味で国際ロータリーに多大な貢献をされた方でもございます。こまめに日本の現状を理事会などで訴えて頂きまして、最近の理事の中で、板橋理事のご活躍を色々な方々から耳に致す度に嬉しく存じております。そういう方をマジアベ会長が、この地区大会に会長代理としてご指名されたということは、我々にとっても有意義なことでもあります。今後ともよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

また、同志社大学のキャンパス全部を開放して頂きまして、色々ご協力を頂戴致しました同志社並びに八田学長、教職員の皆様方に厚く御礼申し上げます。そして福井ガバナーご夫妻には、この地区大会のために色々ご準備、その他万端を務められました。誠にユーモアがあり、その中にも誠実なご指導力で、この地区大会のみならず公式訪問、その他色々なことをマメにこなされて、我々の指導者としてお務めを頂いています。先ほどは色々アドレスを頂いて嬉しく存じています。ご苦労様です。特に杉山大会委員長はじめ6クラブが共同でこの大会を催して頂いたわけで、京都、福井、滋賀、奈良の1府3県にわたります非常に広範な地域でございます。そこへもちまして京都府が京都市を中心に致しまして北部と南部に広く発展してきています。そういう意味におきまして、南部の方の6クラブが協力して頂きまして福井ガバナーを支えられて、この学研都市、京田辺市で開催させて頂いたということは、私どもにとりましてもいい経験をさせて頂き、色々なことを学ばせて頂いたことを、当事者の皆様方に御礼を申し上げる次第でございます。

さて、いよいよ2004年の国際大会が目の前に迫ってまいりました。その準備で今や大阪を中心と致しまして実行委員会が日々ご努力を頂いているわけでありす。現在のところ、12月15日が第1次締め切りになっておりますけれども、登録の一応の状況というものが入手元に入ってきています。実際に登録を世界各国からされておりますのが、ロータリーに加盟しています166カ国中の約80カ国から申込がきていて、大体今のところ1万名を超える申込でございます。こういうことになってきますと、有に締め切りまでには2~3万というようなことになってくるのではなかろうかと思われす。そしてまた、国内の登録者も続々と出ていまして、特に主催の地区であります私ども4地区では色々な質問があります。例えば各クラブが台湾であるとか、韓国であるとか、フィリピンであるとか、色々なところとシスタークラブを締結されています。1クラブで多いところでは3つぐらいのクラブと交流をされています。今度の国際大会には、そういう友好クラブの方々が随分参加されます。この場合に前日の前夜祭であります京都デーの時に、友好クラブの方々が参加されます。それに対して、地元であります各クラブの皆様方がご接待役をしなければなりません。その場合に、京都デーは一応3,000名と限定していますが、それを超えたらどうなるのか。特に全国のバスターガバナーの皆さん方からも、「京都デーから是非伺いたい」というような問い合わせもあります。実際のところ、富田実行委員長も色々な問題で、それを検討しています。できるだけ皆様方の方で、友好クラブで何人ぐらいお出でになるか。それに対しまして自分のクラブから何名ぐらいがお世話で京都に来られるのか、このようなことをできるだけ早くご検討頂いて、富田実行委員長の方にお申し出を頂きたくいうことを、私のスピーチの時間を利用して頂きまして、是非お願いしてほしいということです。混乱が起りませんように、私どもはスムーズに事を図っていきたくと思っています。そういうことで、是非ひとつよろしくご協力のほどをお願い申し上げます。

先ほど板橋元R.I.理事から色々会長代理としての有益なスピーチを頂戴しています。私がここで皆様方にお話申し上げたいことは、やはり未来へのロータリー、これから国際大会を関西で4地区が共同して行い、未曾有の大会になることだろうと思っています。それ

を乗り越えまして、日本国内のロータリアンに一致団結して頂く、ひとつの奉仕というものに対して心を寄せて頂くということによって、ロータリーの意識というものが向上するというのを、私どもが一番望んでいるわけです。そういう意識の向上という目標を持って頂くということが、次の未来にロータリーを続けていくことの問題点になるのではないかと、私はそういうふうには思っています。

今までの国際大会を主催致しました地元のそれぞれの国、或いはホストの町の状態は、やはり国際大会をした後と、する以前の状態は、丸っきり変わってきているというふうな現状報告を頂いています。それはどうということかと言いますと、やはり国際大会ということは世界各国からロータリアンがお集まりになります。そういうことで、その町に一つの画期的な状況を与えるということは、これは当然であります。ただ、それによって経済的な効果が上がるということは、あまり望むべきではないかもしれませんが、色々な意味におきましてロータリアンの奉仕というものが、その地域社会に現実的に大きな結びつきをするということが、この国際大会の意義の一つであり、かつまたロータリーというものの活動を地域社会の方々に認識して頂く一番良い機会になることは当然であります。そういうことで、ポール・ハリスは国際大会を開催するにあたりましてこういうことを申しました。「ロータリアン一人ひとりが国際大会に参加する意義を見つけることによって、より多くの友情とそして奉仕の実をあげることができるであろう」ということであります。

ポール・ハリスが1910年に第1回の国際大会をシカゴで開催致しました。それからちょうど100年目にあたります2005年にシカゴにおきまして、いよいよ100周年を記念する国際大会が開催されます。そういう時に私どもがロータリアンとして存在しているということは、誠に意義が深いことではなかろうかと。そしてこそぞってシカゴの100周年の記念すべき国際大会に出席致しまして、そして100周年というのを自分の体で、心で感じて頂く。即ちロータリーの未来というものをそこで思い、それを如何にすれば色々な意味において存続させていくことができるのかということになってきます。現在、120万人の会員が現存しているとはいえ、それは必ずしも増加していくという傾向ではないのであります。先ほど、板橋R.I.会長代理が会員増強

につかまして、足利東ロータリークラブの一例を挙げてお話を頂きました。そういう意味におきまして、会員一人ひとりが会員増強のためにご努力頂くことによって、少なくともクラブが会員を増強することができるのではなかろうかと思えます。しかしながら、その反面を考えてみますと、誰でも彼でもロータリーに引っ張り込んで、会員を増強したということになりますと、これはロータリーの内容というものが低下していくという恐れがあります。現実には各日本の地区におきまして、クラブはこしらえたけれども、会員がどんどん減ってきているというのが現状であります。日本だけではなくて世界中が会員増強に悩んでいるということです。色々な原因を考えますと、単に経済不況という問題だけではありません。やはり若い人たちが、次世代を担う若い人たちがロータリーというものに対して理解がないということです。若い人たちが作っています青年会議所、私どもも青年会議所の出身でもあります。この中にも随分JCのメンバーもいらっしやると思えます。そのJCですら現在会員数が減ってきています。そうした奉仕団体であるとか、或いは友好の同士が集まって組織を作るという、組織の中に入って物事をしようという若い人たちが段々減ってきているということです。それが今や世界の大きな流れではないかと思えます。

私は先々週、中国の北京へまいりました。これは北京大学で来年度から茶道が正課に採り上げられるということで、私とその客員教授で招かれることになり、その契約のために北京大学へまいったわけです。ちょうど寒波が参りまして、11月6日でしたが前の日からの氷雨が、朝起きましたら雪に変わってしまっていて、もう20cmぐらいの降雪でした。泊まっているホテルから北京大学まで相当距離があり、先導者の車と走っていくのですが、なかなか除雪もできていなくて、あちらこちらで車が事故を起して大変でしたが、予定通りに北京大学に着きました。東京大学と同じように北京大学に入りますとちょうど右側に池があります。この池は蓮池ですが雪をすっぽりかぶっていました。私が歴史学部の建物に車を進めていきますと、若い人たちが雪掻きをしています。急に雪が降りまして色々なものを持って来て大学のキャンパスの中を雪掻きをしています。私は初め、「この大学には雪掻きの人があるのかな」と思ったのですが、それにしてもみんな

が若いなと思っていたわけです。歴史学部で学長や北京大学の総長などと面会してお話をした時に雪の話がでましたので「先ほど、校内で皆さんが雪掻きをしておられましたが、ああいう方は常時どこからか入れられるのですか」と質問をしました。すると学長先生が「いや、実はあれは学生たちなんですよ。何も言わなくても色々な時に学生たちが集まってきて、あのように雪掻きをしてくれます。いうなれば奉仕ですね」と言われました。私も中国へ度々まいりましたが、奉仕という言葉聞いたのは初めてでした。その時に私は思いました。「これなら中国も奉仕という実を、本当にボランティアということを考えるならば、ロータリーができないということはないだろう。将来、この中国にロータリーというものができたならば、これは凄い力になるのではなかろうか」と。

ご承知のようにロータリーはアメリカが発祥の地です。アメリカがいわゆる主導権を全て握っています。国際ロータリーで板橋さんも小谷さんも私もみんな役員としてお務めを致しました。何回も何回もエバンストンへまいりまして、そして理事会や委員会に出ました。その時にいつも思うのは、英語圏でありますから英語は当然でありますけれども、事務局の機構から全てがアメリカの主導権によって決められているということです。従いましてなかなか私どもの言う意見というものは即座に通っていかない。会長がいられてその都度いいテーマでご指導を頂戴するのですが、残念ながら会長にいられても一年限りです。世界各国から選ばれた会長がいられても、一年ではなかなか意思の伝達、改革をするにはあまりにも時間がなすすぎる。いわゆるアメリカの出来上がった一つの機構の中で動いている組織というもの、そういう組織は100周年を迎えたあたりで見直し、考えていかなければならないのではないかと。アメリカにおいてのロータリーの発祥、それに伴う長い歴史、組織の機構というものをそのまま維持していくならば、結局国際ロータリーというものはアメリカのロータリーにしかすぎないということになります。

私が先ほど中国のお話を致したのは、やはり中国のようなところに、もし仮にロータリーというものができていくとするならば、日本や中国が一体になってこれからのロータリーというものを強力な力で指導していくことができるのではなかろうかと。一つはそ

ういうことを思うのであります。

また、私は昨年の11月25日付けをもって、日本国際連合協会の会長に就任致しました。これは大変な仕事でありました。国連の改革、この国連の内容、機構を見ましても日本は非常任理事国です。勝った国だけが理事国、要するに常任理事国です。中国、ロシア、そしてアメリカ、フランスです。そういう国々が主導権を持っています。しかも、非常任理事国であります日本は、アメリカが28%の拠出金ですが日本は22%で、世界第2位です。常任理事国でありますロシアや中国、フランスのその他の国々はわずか2.2%、ロシアなどは1.8%という拠出額です。そういう拠出額で、戦勝国であるために常任理事国になっています。全ては常任理事国がOKをしなければ物が通らない。私はアナン事務総長にお目にかかって色々とお話を致しました。今や国連改革の時期になっています。日本も常任理事国入りするためには常任理事国の枠を増やしていかなければならない。その時に私は国際ロータリーの色々なお話を致しました。

国際ロータリーがポリオに致しましても、地雷の撤去にしても色々な国際的なプログラムを持っているので、国連と一体になってやらなければならないというのは事実であります。それがために、国際ロータリーは今国連に大変近づいて、一体になって物事をしようというような気運が高まっています。ところが国連の方では国際ロータリーというものに対して、或いは国際ライオンズに対しましても、これは一つの国際的な奉仕団体だと、それ以外には何の認定すべき手段方法もないというわけです。任意団体ということです。その任意団体がある意味においてはいいのでありますが、政治に関与せず、いわゆる危ないことには口出しをしない、そういうのが昔からのロータリーの方針です。しかしながら色々な意味において、これだけの国際的な組織をもっていますロータリーが、ポリオの問題に致しましても素晴らしい貢献です。国際ロータリーが国連のWHOと一緒にやってポリオについて根絶の宣言を致しましても、それはWHOの手柄になってしまう。国際ロータリーはその背後で支えているということにしかすぎないわけです。ユネスコは大きな組織を持っている教育文化機関であります。国際ロータリーが色々な教育プログラムを持ちましても、やはりユネスコというものが国連の中では強力な力を

持っています。結局、私たちが一生懸命努力をして、そして国際ロータリーが一体となって事業、プログラムを推進しても実のところはなかなかそういうものが世界的に認定されないというような状態です。それはそれでいいじゃないという方々もいらっしゃるかもしれませんが。何もそういうことが顕著になって我々の手柄になることなど必要じゃない、陰徳が大事だということをおっしゃる方々も随分いらっしゃいます。

しかし、未来のロータリーというものを我々が考えた場合に、もう陰徳ばかりで過ごしていくロータリーであってはならないのではないかと。このあたりで陰徳から脱皮して、そして国際ロータリー、それに所属致します各クラブが、お一人おひとりがおもっともっと大きな力を発揮していかなければならないのではないかと。ポール・ハリスは「ロータリーには未来がある。何故ならばロータリーは善意の一つの塊だ。そしてその魂が隔々まで行き届くのである」と言っています。私たちはロータリーに入って、ロータリーというものの教えの中で奉仕という魂を頂きました。この奉仕という魂を次の世代に受け継がせていくためには、まずやはり次の世代の人たちのロータリーに対する認識、そしてロータリーで共に奉仕活動をしてもらうという場を持ってもらわなければならないと思います。

我々だけがクラブで、その存在意識を持つというのではなくて、この度も6クラブが一体になってこれだけの素晴らしい大会をされました。ですから、6クラブですらこれだけのことをなさるので、我々が、2650地区がみんな力を合わせてやったならば、会員増強であろうが、色々な交換事業であろうが、そうしたものをもっともって世間に結び付け、地域社会に対して大きな認識を足跡として残していくことができるのではなかろうかと。即ち、I SERVEという時代から始まったロータリーは、I SERVEを根源としています。WE SERVEに移っていかなければならない。WE SERVEというものこそ、このロータリーが未来に続く大きな根源であると思うのであります。

私たちはその一つの試しとして、来年2004年に国際大会を迎えるわけであります。その国際大会に皆様方お一人おひとりが参加して頂いて、そしてその中から色々な体験というものを次の世代に結び付けていくようにしなければ、ロータリーの未来というものは単な

る塊で死んでしまうのではなかろうか。単なる塊ですまないようにしていくのが、現在の私たちの務めではなかろうかと思っています。

ここにお集まりの皆様方お一人おひとりは大変な善意をお持ちの方ばかりであります。そういう皆様方の善意を一つの糧として私たちがもっと身近に一体感を持って、ロータリーの奉仕というものの中にあります色々なプロジェクトを一つひとつ実践していかなければならないということ、私自ら痛感しています。先ほどもポリオ・プラスの問題につきまして会長代理の方からご報告をと言われましたが、時間がまいりましたので簡単に申し上げます。昨年の国際大会におきまして、これはオーストラリアのブリスベンでありました。寄付が8,000万ドルを超えまして、有難い世界中の皆様のご努力のお蔭です。日本におきましては昨年末で770万ドルということで、まだまだ1600万ドルの目標には達していません。ですからお一人おひとりが50ドルずつ150ドルを出して頂く。この地区内でもそれを100%以上達成して頂いたクラブが随分あります。しかしながら、まだまだ達していない20%台のクラブが多くなっています。他の地区におきましては0%というところもあります。当地区を管轄して頂いていますポリオ募金委員会の西村二郎パストガバナーから11月29日にありますロータリー研究会でご報告があった後、皆様方各クラブにご指示を申し上げまして、ポリオ最後のご協力を色々な意味でお願い申し上げたいと思います。ポリオは終わらないのです。ポリオは本当に気の毒な可哀相な国々の子供たちが、皆様方お一人おひとりの、ささやかであってもその善意の気持ちの実ることによって救われていくということを私は最後に申し上げたいと思います。

どうか皆様方の善意の心をお示し頂きますように、あえて申し上げまして私のお話を終りたいと思います。有難うございました。